ありがとう 鈴木穆さん

～本紙・名物コラム「高津物語」の生みの親に感謝の意をこめて～

当欄は、タウンニュース高津区版の黎明期から四半世紀近くにわたり紙面を飾り続けた「高津物語」の著者・鈴木穆氏を偲び、ご子息の淳氏による全面協力の下、その功績などを振り返るページです



高津物語への思いを語る鈴木穆氏（写真は2019年当時）

本紙・高津区版の名物連載コーナー

「高津物語」に注ぎ続けた地元への愛情

次世代への情熱に満ちた足跡、辿る

本紙上を創刊号から飾ってきた連載コーナー「高津物語」の著者・鈴木穆（あつし）氏が、11月6日に誤嚥性肺炎のため逝去された。享年89。穆氏は高津区文化協会会長などとして長きにわたり多方面で活躍。その一方、本紙の創刊第一号と同時に産声を上げ、以来四半世紀近くにわたり読者に愛され続けた名物コラムの執筆を手掛け、時代と共に変貌を遂げていった地元の原風景や人々の営みを言葉によって留め、次代へ繋ごうと情熱を注ぎ続けた。そんな穆氏の高津区への深い愛に満ちた足跡を振り返る。

前人未到、休載ゼロの「1085回」

1996年（平成8年）5月23日、「タウンニュース高津区版」の創刊と同時にスタートした連載コラム「高津物語」。著者の穆氏は2019年（平成31年）3月1日号掲載の最終回（第1085回）に至るまで、実に約23年もの間、一度の休載もなく原稿のペンを握り続けた。

取り上げたテーマは多岐にわたる。地名の奥深い由来、かつて人々が行き交い賑わいを見せた大山街道の情景、凄惨な戦時中の記憶、そして地域を揺るがした事件の数々。単なる歴史の羅列ではなく、そこに生きた人々の息遣いが聞こえてくるような独自の温かな物語調は、読者を惹きつけてやまなかった。

毎号、紙面が発行されるたびに「今週の高津物語を読んで、昔を思い出した」「自分の住んでいる地域にこんな歴史があったとは知らなかった」と、編集室には読者からの喜びの声が絶えず寄せられていた。

足で稼いだ郷土の記憶

穆氏の執筆を支えていたのは、徹底したフィールドワークと文献調査、そして何より古老たちからの「聞き取り」だった。区内をくまなく歩き、些細な石碑や道の形から過去の記憶を呼び起こす。その情熱は、郷土資料としての価値を極めて高いものにした。

連載20周年を迎えた2016年（平成28年）。当時、950回目の連載を間近にした穆氏は「まだまだ書き足らないよ」と笑顔をみせつつ本紙にこんなメッセージを寄せている。「街の記憶は、語り継がなければやがて消えてしまう。高津区の歴史を知ることは今を生きる私達の足元を照らすこと」。その使命感と強い情熱について当時の弊紙担当編集者は「がんで入院された時も筆を止めることなく連載を続ける姿に、大きな感銘を受けた」と回顧する。

色褪せない「高津区の心」

「高津物語」の連載が終了した後も、その情熱の結晶は色褪せることなく地元の共有財産として輝き続けている。シニア世代にとっては自らの人生を重ね合わせる懐かしい友として、若い世代にとっては自らが暮らす地域の成り立ちを知るための最良の教科書として。

変わりゆく街並みの中で、私たちが何を失い、何を守ってきたのか。晩年は高津区文化協会名誉会長としても尽力した穆氏の眼差しは、常に「高津の未来」に向けられていた。一度も休むことなく郷土への愛を綴り続けた穆氏が残してくれた1085編の物語は、これからも、高津区の街並みとともに生き続ける―。

新人記者の視点で紹介

高津物語の「面白さ」とは

真っ新な感覚で魅力浮き彫りに

タウンニュース高津区版で長年にわたり連載され、多くの読者に愛された「高津物語」。郷土の歴史を紐解き、単行本としてもまとめられている同作は、地域を知るための貴重な道標（みちしるべ）として今もその輝きを放ち続けている。

そんな中、この「高津物語」に俄然、興味を示しているのが弊社高津区編集室に今秋、加入したばかりのM記者。今年の夏までは都内でホテルマンとして勤務し、異業種へ転職を果たした同氏にとって「高津物語」は記者活動の拠点となる担当エリアを知るための最高の教材のひとつ。そこで「高津物語ってなに？」「これから一度読んでみたい」といった読者のために、M記者が新人ならではの真っ新な視点で、この著書を紹介する。

「史実の羅列」にあらず

M記者はまず「高津物語の執筆にあたった穆氏が一貫して大切にしていたのは、単なる年表や史実の羅列ではなく、その土地に息づいていた『人々の営みへの温かい眼差し』」と分析。具体的には「江戸時代に大山街道の宿場町として賑わった二子の渡しや溝口の様子」や「多摩川の水の恵みとともにあった梨づくりや養蚕の記憶」、さらに「急速な都市化の中で移ろいゆく街並み」等といった多岐に及ぶテーマを題材に膨大な資料の読み込みと地道な地域への取材に裏打ちされた文章は「まるで当時の風景の中へと誘うような優しさと臨場感に満ちていた」と説明する。

「コンパクトさ」も魅力

また「1話ごとのコンパクトな構成と柔らかな語り口は、地元住民に改めて故郷への誇りを抱かせただけでなく、高津区にゆかりのない（私のような）読者までも惹きつけた」と力説。「土地勘がなくても、地元の案内人と散歩しているように楽しめた」「教科書には載らない、街角や地名に刻まれた土地の記憶を丁寧に紐解いていた」といった感想を口にすると共に「地域の記憶を次の世代へと手渡そうとした筆者の想いが、時代や場所を超えて確かに届いていた証しなのでは」とも。さらに「ページをめくるたびに立ち上がる、かつての高津区の風景と人々の息遣い。地域を深く愛し、丁寧な言葉で街の記憶を紡ぎ続けた高津物語は私にとって、これからこの街で記者活動を本格的に行っていく上で、心の拠り所にもなる作品。ぜひ未読の人にも手に取ってもらえれば」と呼び掛けている。



ふるさと館などで購入可



著書を手にする鈴木穆さん（左）と息子の淳さん

不定期連載コラム

俳優・JUN、かく語りき

第16回　ありがとう パパ

このコーナーは…

多様性やダイバーシティ。そんな言葉をよく耳にするけど実際どういうこと？そんな疑問を解消すべく、自らの生き様をもってSDGsに挑戦している高津区在住の俳優・鈴木淳さんにコラム執筆を依頼。ジェンダーの壁にぶつかった経験もあるJUNの言葉から「多様性を考えるヒント」を探ります。



家族4人でクリスマスを楽しむ様子

タウンニュース高津区版をご覧の皆さま、こんにちは。高津区出身の「多様化の表現者」鈴木淳です。今回は私の愛する父について書いてみようと思います。

私の父、鈴木穆(あつし)は去る11月6日満89歳にて永眠いたしました。葬儀は家族葬にて執り行い、無事に家族で見送ることができました。父の最期の言葉は、両手を合わせるようにして伝えてくれた「ありがとう」でした。この言葉は、私に対してだけではなく、生前親しくしてくださった全ての皆様に向けた、父の感謝の気持ちだったと私は受け止めています。父に代わりまして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

父は代々川崎市高津区の住民で、27歳で当時の川崎高津郵便局（現在の川崎溝ノ口郵便局）の局長に就任し、以後65歳まで局長を務めたと聞いています。昭和49年（1974年）には、高津青年会議の理事長として、現在の「高津区民祭」の前身である「高津区納涼祭」を成功させました。

また、1996年のタウンニュース高津区版創刊時から、2019年の最終回（第1085回）まで、「高津物語」と題したコラムを一度も休むことなく連載しました。高津区内各地の地名の由来や大山街道の賑わい、戦時中の記憶など、郷土史研究家として父が生涯をかけて徳を積み、歴史の道を歩み続けた証である「高津物語」は、上中下の三分冊で刊行され、本年3月には重版出来となりました。連載当時、父は毎回手書きの原稿をファックスで送っていたので、編集ご担当の方が判読しづらかったと伺ったことがあります。前後の流れから、きっとこの言葉だろうと理解出来て、初めて一人前の編集者として認められたそうです。かく申す私も、あまりに達筆すぎる父の字体が読めず、何と書いてあるのか、よく本人に尋ねていたので、ある意味私も未だ父に認められていないのかも知れません。偉大な父の背中に追いつけ追い越せ、まだまだ人生勉強が足りない不肖の一人息子です。

一方、今では私の大切な家族となっているパートナーの英浩(ヒデ)は、早くから父に認めて貰えたようで、我が家に立ち寄る度に父から言われた「ヒデちゃん、家においで。家の子になっちゃえばいいよ。」という言葉で、安心感に包まれたそうです。父の言葉通りに家族になってからは、手料理を美味しそうに食べてくれて、「ヒデちゃんが家に来てから、我が家が明るくなったよ。」と言って貰えたことが本当に嬉しかったと語っています。

先日、ヒデと二人で観たある作品の中に、私の心を揺さぶった台詞がありました。

「波のうねりや潮の香りを感じたとき、そこにはいつも私がいることを思い出して欲しい。」

私のすぐそばにも、いつも優しく見守ってくれる父の存在があります。父が愛した「歴史と文化のかおるまち」高津で、いま私は自分に与えられた役割をひたすらに果たして行きたいと決意も新たにしております。胸に刻んだ「ありがとう」の言葉と共に。

鈴木穆の納骨堂は「赤坂不動尊威徳寺」

（赤坂一ツ木陵苑）

東京都港区赤坂4丁目1−10

四十九日（しじゅうくにち）は12月24日㈭（Xmasイブ）です

筆者／鈴木 淳（じゅん）さん

1968年生まれ。高津区在住。大学在学中に劇団四季のオーディションに合格。ミュージカル「ジョン万次郎の夢」などに出演する。劇団四季退団後は大型テーマパークでライブアクターとして出演。現在は俳優、MC、講師として活躍している。また、キリスト挙式正教師（ブライダル牧師）の肩書も持つ。



SNS公式アカウントはこちらから

高津物語 歴代編集担当者が語る 鈴木穆さんとの思いで

タウンニュース高津区版で四半世紀近くの超長期連載となった「高津物語」。歴代の編集担当者に、当時の思いでなどを語ってもらった―

創刊当初、タウンニュース紙面を地元に定着させるため、信頼ある文化人の穆さん快諾の下「高津物語」を掲載することができた喜びは忘れられない。

高津区編集室・初代編集長 壁島義明氏（故人・連載最終回にあたり2019年に寄せていただいたコメントを再掲）

毎回原稿を受け取りにいった際、穆さんの「大切なものを託すよ」というような表情が印象的でした。その「高津物語」の切り抜きが訪問先の店舗等に掲示されているのを見ると、担当者としてうれしい気持ちになったものです。

高津区編集室・3代目編集長 木曽祐司（現・藤沢支社）

穆さんの出身学校の記事でミスがあった際に、次号で訂正とお詫びを入れたところ、穆さんから「一言相談してくれれば良かったのに」とおっしゃっていただき、頼もしく思った記憶があります

2016年頃・担当編集記者 佐々木貴広（現・相模原支社）

穆（あつし）さんの変換が「ぼく」と打てば出ることを歴代担当者は引き継いでいるのでしょうか…。

高津区に赴任して右も左も分からない頃、穆さんには地域の方々をご紹介いただいたり、歴史もお教えいただきました。いつも優しい笑顔で出迎えてくださり、奥様と3人でお話するのが本当に楽しかったです。

高津区編集室・5代目編集長 土谷晃（現・県央支社）

「高津物語」書籍情報

◆構成：上・中・下巻の3分冊（合計約800ページ、各巻2,200円・税込）

2026年3月に重版され、川崎市大山街道ふるさと館の通信販売や店頭、川崎市岡本太郎美術館内のショップなどで取扱い中です

大山街道ふるさと館の通販ページはこちらから